

私立大学校歌の時代的特徴

—歌詞の計量テキスト分析—

小林 勝法

Characteristics of Private University School Songs by Time Period:

A Text Mining Analysis of Lyrics

Katsunori Kobayashi

I examined 116 school songs of private universities which I found through their websites or by contacting them, in order to analyze their characteristics. Of them, 110 universities (94%) had established school songs. I obtained and investigated the lyrics of 109 of those by classifying them into the following time periods according to the year they were established:

Old system period (1920-1947) : The period of the old school system

Expansion period (1948-1988) : The period after World War II, when many universities were established

Heisei period (1989-2014) : The period when the 18-year-old population began to decline, women's colleges became coeducational, and junior colleges became universities

Upon text mining the lyrics, I found the following characteristics:

· In the lyrics, 75 of the university songs included the name of the university (69%), 36 mentioned the founding spirit (33%), and 73 had details including the name and features of the landscape where the university was located (67%).

- ・ The words that appeared most often in the lyrics were “my”, “our” (246 times), “Oh!” (84 times), “world” (75 times), and “alma mater” (61 times).
- ・ Many of the frequently appearing words were common to both the old system and expansion periods which extolled the spirit of young people studying to seek their ideals, bring honor to their alma mater, and make history.
- ・ Inspiration, and support for life and school life appeared to be characteristic of university songs in the expansion and Heisei periods with words like “dreams”, “friends”, and “flowers” appearing often. The trend grew even stronger in the latter period where I observed words like “tomorrow”, “future”, and “youth”.

The increasing in the ratio of university admission has changed the university culture and student temperament, and this is reflected in the characteristics of the school songs.

はじめに

日本ではほとんどの学校に校歌があるが、外国ではあることの方が珍しいという（校歌こだわり調査隊2004、12頁）。日本で校歌が作成される契機となったのは1893（明治26）年に文部省が告示した「祝日大祭歌詞並楽譜」である。この告示により小学校の祝典で、国歌や式典曲が歌われることが定められ、その後次第に各学校で校歌を制定し、歌うようになったと考えられている（浅見雅子ほか1996、21頁）。現在では、小学校から大学までほとんどの学校で校歌を制定している。

校歌とは、「学校で建学の理想をうたい、校風を発揚するために制定した歌」（広辞苑2018）と簡潔に説明されている。また、教育経営事典には、「歌詞には、その学校の、①地理的環境、②自然的環境、③物理的環境、④歴史的環境、⑤学ぶ者の心構え、⑥校訓（学校の描く理想

像)、⑦道徳的目標、⑧未来への夢や希望などが、その内容として盛り
れることが多い。」と記されている。全国の中学校3,629校の校歌を分析
した浅見雅子・北村眞一は、校歌の意義として、「学校の教育方針を歌
に詠み、歌うことによって学ぶものに確認させるという役割をもってい
る。学ぶものの心構え、未来への夢や希望、人生の厳しさと励ましの言
葉などが詠み込まれています。地域の環境、気候や地形などの自然環境
や郷土の人物歴史などの文化的環境が詠み込まれます。これは原風景を
確認し、郷土愛を育てる役割を持っている。」と述べている（浅見雅子
ほか1996、3-4頁）。伝統的な校歌には、「教育方針・校訓」と「学ぶ
心構え、夢や希望、激励など」、「周辺環境（地理や自然、歴史など）」
の3要素が含まれていると言える。

しかし、時代が経るにつれて校歌の歌詞の文体は文語体だけでなく、
口語体も現れ、内容も地域の自然や校訓などは盛り込まず、現代風の軽
やかなメロディで学校生活をおおらかに歌う校歌も近年では増えている
という（校歌こだわり調査隊2004、25-27頁）。多くの校歌を作詞して
いる詩人の谷川俊太郎は1974年に著した論考の中で、敗戦を境とした国
歌の教育方針の変更によって、校歌の字句の一部を修正した例を示すと
ともに、「校長の教育観や教師の情熱、生徒のエネルギーなどをもとに
した、歌詞の面でも音楽の面でも新しいスタイルの校歌がつくられてい
る。」と述べている（谷川俊太郎1974）。

はたして、大学の校歌はどうであろうか。早稲田大学校歌が1907年、
明治大学校歌が1920年に制定され、1920年代から次々と作られるよう
になった。文語体で建学の精神を高らかに歌うものが多いが、時代の変遷
と共に校歌の文体や内容も小中高校と同じように変化しているのでは
なかろうか。そこで、校歌の歌詞を計量テキスト分析し、その時代的特徴や内
容の変遷を明らかにしたい。文体のほか、頻出語（名詞、形容詞）、建

学の精神などとの関連を分析する。

1. 先行研究

校歌に関する学術的研究はおもに中学校を対象にしたものが多く、歌詞に歌われた自然環境や歴史などを分析している（浅見雅子ほか1996、朝倉隆太郎1999）。これらは、研究者の主観によって単語を抽出しており、客観性の保持に限界がある。近年では、計量テキスト分析の手法を用いた研究もあるが、景観だけを対象としている（牛口聖矢2011、塚田伸也2013）。なお、言語学的研究としては、倉敷市の小中学校（約200校）を調査した結果、「小学校では1960年代以降制定された歌詞は現代文法が多い。」と結論づけた研究がある（尾崎喜光・杉尾瞭子2015）。大学の校歌を対象とした研究は、個別の事例に関する歴史研究があるだけである（瀬戸口龍一2013）。

2. 目的

大学の校歌の制定と歌詞に関する全般的な状況を把握し、その歌詞を計量テキスト分析することで、その時代的特徴を明らかにする。なお、時代については、大学の設置時期によって3期に分ける。すなわち、戦後しばらくまでの旧制度の時期（以下、旧制期）と戦後に大学の新設が相次いだ拡大期（以下、拡大期）、18歳人口が減少に転じ、女子大の共学化や短大の四大化が進んだ平成時代（以下、平成期）である。また、校歌ではなく、学園歌や学生歌として制定している大学は、それを分析対象とする。

3. 方法

1) 調査対象校と対象歌

時代ごとの比較をする際に大学の基本条件を揃えるため、以下の2つの条件に合致する4年制大学を調査対象校とした。

①私立大学

国公立大学は設置数が私立大学と比べて少ない上、校歌を制定している大学も限られる。そこで、設置数が多く、校風も明確な私立大学を対象とした。

②学部生の収容定員数が1,200人以上

できるだけ規模の大きい大学を対象としたが、平成期に開設した大学は小規模大学が多いため、下限を1,200人とした。そして、それぞれの時代区分ごとに30大学程度の歌詞を得ることを目指した。

2) 歌詞の収集と整理

大学や同窓会などのホームページに掲載されている場合はそれを対象とし、掲載されていない場合は、『全国大学短大高専校歌集』（須藤豊彦1985）を閲覧したり、大学に問い合わせたりして収集した。調査期間は2019年6月から8月であった。

歌詞をテキストデータ化し、大学の基本情報とともに表1に示すデータベースを作成した。

表1 データベースの内容

大 学	大学名、設置年、収容定員数、 建学の精神、スクールカラー
校 歌	歌名、制定年、作詞者名、作曲者名、 歌詞

3) 分析方法

校歌とその歌詞について、以下の3つの方法で分析した。そして、その際に、旧制期、拡大期、平成期の時代区分ごとに分析し、時代区分ごとの特徴を明らかにした。

①校歌の制定と制定年

大学として校歌を制定しているかどうか、その制定年はいつかなど一般的な状況を把握した。

②歌詞の文体や構成要素

歌詞の文体のほか、歌詞に大学名や地名、建学の精神などが含まれているかどうかを分析した。

③歌詞の計量テキスト分析

歌詞の計量テキスト分析には、技術情報が公開されている分析ソフトのKH Coder (樋口耕一2014)を使用した。語が意味を持つ最小単位に分解し、その出現回数を算出した。その際、否定助動詞(ない、ぬ、ん)と平仮名のみ動詞(する、なる、ある等)、固有名詞の大学名を除いた。また、類似の語は同一の語として認識させる設定をした。統合した語は表2に示す通りである。

そして、頻出語と時代区分の関連性を分析するために共起ネットワークを描画した。これは出現回数の多い語ほど大きい円で描画し、共に使用(共起)されている時代区分を線で結んで、関係性を可視化する分析方法である。共起の大きさはJaccard係数を用いる。Jaccard係数は、時代区分aの文の数Aと語bを含む文の数Bを用いて、次のようにして算出する。

$$\text{Jaccard係数}(a,b) = (A \cap B) / (A \cup B)$$

なお、集計単位は「文」とし、歌詞の1つの節(一般的には「番」と言われる)を1つの「文」として分析した。つまり、3番まで歌詞がある場合は、3つの「文」とした。

表2 表記の統合

統合語	統合した語
我	我が、我等が、吾、吾が、わが、われらが
おお	ああ、あゝ、おゝ
輝く	輝か、輝き、輝く、輝け
世界	世
若い	若き、若さ、若し、若く
高い	高き、高く、高し、高らか
見る	見よ、見れ
立つ	立ち、立て、起ち、起て
今	いま
学ぶ	学ば、学び、学べ
仰ぐ	仰い、仰ぎ、仰げ
生きる	生き、生きよ

4. 結果

1) 対象大学と歌数

3-1) で示した条件に従って合計116大学を調査した。大学設置年と学生数（収容定員数）、その中央値は表3の通りである。旧制期は大規模大学が多く、拡大期は大中規模大学、平成期は中小規模大学が多い。なお、女子大は拡大期の12大学だけであった。校歌を制定している大学は110大学（94%）であった。表3で「不明数」というのは、大学ホームページに掲載されておらず、大学に問い合わせても回答が得られなかった数である。制定しているものの歌詞が得られなかった大学が1つあったので、集計・分析の対象にした大学数は、旧制期の29大学、拡大期の50大学、平成期の30大学の合計109大学であった。

表3 調査対象大学

	旧制期	拡定期	平成期	全体
対象大学数 (女子大学数)	29 (0)	53 (12)	34 (0)	116 (12)
大学設置年	1920～1947	1948～1987	1989～2014	－
学生数	3,186～64,567	3,692～24,002	1,230～7,800	－
学生数中央値	19,025	8,063	2,427	－
校歌制定数	29	50	31	110
なし	0	0	1	1
不明数	0	3	2	5
歌詞数	29	50	30	109

非公表1

2) 制定年と文体、校歌名

校歌の制定の経緯について大学ホームページに掲載している大学もあったが、大学に問い合わせても「制定年については大学史をひもとかないとわからない」などと回答した大学が多かった。制定年が不明なのは109大学中40大学（37%）にも上った（表4）。旧制の専門学校時代の校歌を継承している例（早稲田大学）や創立周年行事として制定している例（青山学院大学、100周年）、校名変更により制定している例（文教大学）などがあり、大学設置年とは一致しない場合が多い。大学設置年と校歌制定年が一致しているのは、明治大学（1920年）や平成国際大学（1996年）などの5大学だけであった。制定年の翌年か、翌々年に校歌を制定している大学は8大学であった。

文体は、文語体が多く、全体の86%（94大学）であった（表4）。口語体は旧制期には見られず、拡定期では大阪経済大学学歌（1950年制定）と桜美林大学学歌（1959年制定）、北海学園学歌（1959年制定）の3大学であった。平成期では、30大学中12大学が口語体であった。英語

体の校歌はなかった。なお、今回の調査対象にはしなかったが、国際基督教大学のように日英両語による校歌もある。

表4 制定年および文体

	旧制期 n=29	拡大期 n=50	平成期 n=30	全体 n=109
制定年	1907～1953	1907～2012	1923～2016	—
不明	7	18	15	40
文語体	29	47	18	94
口語体	0	3	12	15
英語体	0	0	0	0

校歌名に大学名が入っているものは95大学（87％）であった。平成期は30大学中20大学（67％）で、比率的に少ない（表5）。大学名の後に「校歌」や「学歌」「学院歌」などをつなげる場合がほとんどであるが、「学生歌」が4大学（4％）であった。「空の翼」（関西学院大学）や「青春無限」（愛知淑徳大学）のように独自に曲名がついているものがあり、12大学（11％）であった。それぞれの事例を表5に示した。

表5 校歌名

	旧制期 n=29	拡大期 n=50	平成期 n=30	計
大学名	28	47	20	95
学生歌	1	2	1	4
曲名	2	3	7	12
事例	早稲田大学校歌	明治学院校歌	関西国際大学学歌	
	愛知大学学生歌	南山大学学生歌	学生歌 (関西福祉科学大学)	
	空の翼 (関西学院大学)	青春無限 (愛知淑徳大学)	世界にはばたけ (長崎国際大学)	

3) 歌詞の構成要素：大学名と建学の精神、地名

歌詞に大学名が含まれている大学は75大学（69%）であった（表6）。大学名の回数が最も多いのは、「わせた、わせた、…」と1番につき7回連呼し、合計21回の早稲田大学であった。次いで、近畿大学（15回）、西南学院大学（14回）、尚綱大学（12回）、名城大学（10回）であった。なお、大学名には、「荘厳の学府ソフィア」（上智大学）や「Nagasaki International University」（長崎国際大学）などの英語名もあった。

建学の精神が含まれている大学は36大学（33%）で、「権利自由、独立自治」（明治大学）や「理学の普及」（東京理科大学）、「人間是宝」（平成国際大学）などであった。

大学が立地する地名や遠望できる山（富士山や比叡山など）が歌詞に含まれている大学は73大学（67%）であった。

表6 歌詞の構成要素

	旧制期 n=29	拡大期 n=50	平成期 n=30	全体 n=109
大学名	21	34	20	75
建学の精神	6	14	16	36
地名	18	36	19	73
事例	湯島、習志野 (順天堂大学)	筑紫野、玄海 (福岡大学)	伊勢、鈴鹿 (鈴鹿医療科学大学)	

4) 歌詞の頻出語

歌詞に頻出する語とその出現回数を表7に示す。時代区分の3期に共通して多いのが、「我」（246回）、「おお」（84回）、「世界」（75回）、「母校」（61回）、「輝く」（49回）、「光」（49回）、「道」（49回）、「心」（43回）、「風」（36回）、「真理」（31回）であった。

旧制期と拡大期に共通して多いのは、「若い」（36回）、「高い」（34回）、「理想」（32回）、「文化」（31回）、「立つ」（27回）、「空」（25回）、「自由」

(19回)であった。旧制期に特徴的な言葉は、「見る」(24回)、「名」(12回)、「旗」(11回)、「学府」(9回)、「学徒」(8回)であった。拡大期に特徴的な言葉は、「若人」(24回)、「学院」(20回)、「歴史」(11回)であった。

拡大期と平成期に共通して多いのは、「夢」(37回)、「学園」(28回)、「友」(26回)、「花」(26回)、「愛」(20回)であった。平成期に特徴的な言葉は、「今」(17回)、「明日」(16回)、「未来」(11回)、「青春」(10回)であった。

以上を踏まえて、典型的な歌詞の事例を表8に示した。上記の頻出語を太字で示した。各期の特徴が具体的に見て取れる。

表7 頻出語とその出現回数

全体 n=109		旧制期 n=29		拡大期 n=50		平成期 n=29	
我	246	我	83	我	120	我	43
おお	84	見る	24	おお	47	世界	25
世界	75	おお	21	世界	40	夢	24
母校	61	母校	20	母校	26	輝く	21
輝く	49	若い	16	若人	24	光	17
光	49	道	14	高い	23	今	17
道	49	理想	14	学院	20	おお	16
若い	43	輝く	13	若い	20	明日	16
心	43	光	13	心	20	心	15
高い	40	名	12	道	20	道	15
夢	40	旗	11	文化	20	風	15
理想	37	高い	11	光	19	母校	15
見る	36	風	11	理想	18	学園	14
風	36	文化	11	立つ	18	大学	14
学園	33	空	10	人	16	花	13
文化	33	真理	10	輝く	15	共に	12

空	32	力	10	丘	15	友	12
立つ	32	雲	9	空	15	愛	11
真理	31	学府	9	学園	14	求める	11
友	31	自由	9	天	14	未来	11
若人	30	樹	9	友	14	青春	10
人	29	立つ	9	花	13	緑	10
花	27	学徒	8	真理	13	科学	9
丘	27	仰ぐ	8	夢	13	翼	9
愛	24	鐘	8	イエス	12	コスモポリタン	8
大学	24	心	8	生命	12	学ぶ	8
学院	23	人	8	歴史	11	胸	8
命	23	大学	8	自由	10	真理	8
力	22	意気	7	風	10	生きる	8
雲	21	国	7	愛	9	命	8
計	1,330	計	411	計	641	計	423

表8 典型的な歌詞の例

期	歌 詞	大学名	歌 名	制定年	設置年
旧 制 期	進取の精神 学の独立 現世を 忘れぬ 久遠の理想 かがやく われらが 行手を見よや	早稲田 大学	早稲田大学 校歌	1907	1920
	東西文化の粹美をこらし 栄光 輝く我等が母校 見よ見よ立教 自由の学府	立教大学	栄光の立教	1926	1922
	集まる学徒の使命は重し いざ 讃えん 大学日本 いざ歌わん われらが理想	日本大学	日本大学 校歌	1929	1920
	見よ 風に鳴るわが旗を 新潮 寄するあかつきの 嵐の中には ためきて 文化の護りたからか に	慶應義塾 大学	慶應義塾 塾歌	1940	1920
自由の天地ぞ展(ひら)けゆく ああ中央 われらが中央 中央 の名よ栄あれ	中央大学	中央大学 校歌	1950	1920	

私立大学校歌の時代的特徴

拡 大 期	起てよ勇ましく 学院の若き子 等よ 西南 西南 永遠の学院	西南学院 大学	西南学院 大学校歌	1920	1949
	自由の鐘の 鳴るところ 自治 の光を かかげつつ 理想にも ゆる 若人よ 声たからかに 進まばや	日本女子 大学	日本女子 大学校歌	1948	1948
	繁れ自由の 花さく学園 大阪 大阪経済大学	大阪経済 大学	大阪経済 大学学歌	1950	1949
	高き空に わかものはうたう 豊かなる大地のまつりを	文教大学	文教大学 校歌	1966	1977
	大いなる 歴史のなかで われ ら新しい 真理を創る 東京電 大 われらが母校	東京電機 大学	東京電機 大学校歌	不明	1949
	友よ我等 生くる日の 今の喜 び あはれはれ たたえつつ いそしまん	京都女子 大学	京都女子 大学校歌	不明	1949
	仰いで高き青空よ 正しき心の 若人が 自由と平和守り行く	南山大学	南山大学 学生歌	不明	1949
平 成 期	青春の意気満ち満てり おお 成蹊われらが若き いのちのふ るさと	大阪成蹊 大学	大阪成蹊 学園学園歌	1949	2003
	地球は一つ 新世紀 未来に栄 え 世に問わん ああ 平成国 際大学	平成国際 大学	平成国際 大学学歌	1996	1996
	明日への 道を目の前に おそ れずに ひるまずに 作り続け よう	東北芸術 工科大学	明日へ	2012	1991
	花と緑の楽しいキャンパス コ スモポリタン コスモポリタン われらの夢よ 夢見る明日は輝 ける	吉備国際 大学	吉備国際 大学学歌	不明	1990
	絆は世界を築くのだから 明日 の命に応える愛が いま わた しの心にある	環太平洋 大学	学歌「心」	不明	2007

5) 共起ネットワーク

上記の頻出語と時代区分の関係を共起ネットワークとして描画した(図1)。描画に際しては、109大学の歌詞の1番を1文として整理し、

合計301の文を分析対象とした。出現回数の多い語ほど大きい円で描画し、共に使用（共起）されている時代区分（四角）を線で結んで、関係性を可視化した。共起の大きさは前述したJaccard係数を用い、係数が大きいほど太い線で示した。

3つの時代に共通している頻出語、つまり、「我」や「光」、「道」などが中央に配置されている。3時代の中では、旧制期と拡大期に出現回数の多い語が多数見られ、共通性が高いことが示されている。

旧制期と拡大期に共通して多いのは、「若い」や「高い」、「理想」、「文化」などであった。旧制期に特徴的な言葉は、「いざ」や「見る」、「名」で、拡大期は、「おお」や「若人」であった。

拡大期と平成期に共通して多いのは、「夢」や「世界」、「花」などであった。平成期に特徴的な言葉は、「明日」や「希望」、「愛」などであった。

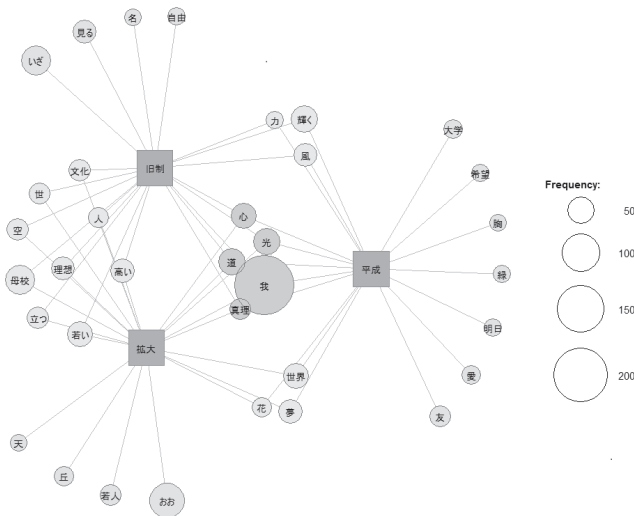


図1 共起ネットワーク

5. 考察

校歌を制定している大学は、116大学中110大学（94%）であり、ほとんどの大学が制定している。校歌名に大学名が入っているものは95大学（87%）であるものの、歌詞に大学名が含まれている大学は75大学（69%）であった。歌詞を読む、あるいは、歌を聴くだけでは、どの大学の校歌か判別できない校歌が約3割ということになる。

小中高校の伝統的な校歌には、「教育方針・校訓」と「学ぶ心構え、夢や希望、激励など」、「周辺環境（地理や自然、歴史など）」の3要素が含まれているが、大学ではどうであろうか。建学の精神が含まれている大学は36大学（33%）と少ないが、「自由」や「理想」、「真理」などの教育理念に関する語は多くの校歌に見られた。そして、「名」や「夢」、「希望」、「愛」などの「学ぶ心構えや激励の言葉」も多くの校歌に見られた。また、大学が立地する地名や景観が歌詞に含まれている大学は73大学（67%）であった。これらのことから、大学校歌においても「教育方針・校訓」と「学ぶ心構え、夢や希望、激励など」、「周辺環境」の3要素が含まれていると言える。

しかし、拡大期から口語体の校歌が現れ、平成期には4割に達した。文体と歌詞は関係しており、歌詞に現れる頻出語も変容してきた。各時代の頻出語と共起ネットワークの結果から以下のように各時代の特徴をまとめることができる。

- ・旧制期は、青年が理想を求めて勉学に励み、国を造り、母校の名を上げ、歴史を刻む気概が謳われている。「学府」や「学徒」などの古い言葉も見られる。
- ・拡大期も旧制期と共通しているが、「夢」や「友」、「花」などの言葉も現れ、人生や学園生活上のことに関して個人を鼓舞・応援するいわゆる学生歌の性格を持つ校歌も見られる。

・平成期では、学生歌の傾向が強まり、「今」や「明日」、「未来」、「青春」などが多くなっている。

これらの時代的特徴の背景は、教育社会学者のマーチン・トロウ(1976)が提唱した高等教育制度の段階説を参考にすると理解できる。この学説は、高等教育進学者数の増加という量的な変化が高等教育の質の変容をもたらすという説で、高等教育機関への進学率をもとにして、エリート段階(進学率15%まで)、マス段階(同15%~50%)、ユニバーサル段階(同50%以上)に区分している(表9)。この学説は、米国の高等教育の歴史的発展をもとに帰納的考察により提唱されたが、日本にも概ね当てはまる。『学校基本調査報告書(高等教育機関編)』(文部科学省2018)から、大学・短期大学数と高等教育機関への進学率の推移を図2に示した。旧制期、拡大期、平成期の3つの時代は、3つの段階に合致している。時代によって大学文化や学生気質が異なり、同質性から多様性へと変容していると考えて良い。校歌の特徴にもそれが表れていると考えられる。

表9 高等教育制度の段階説

	エリート段階 (~15%)	マス段階 (15~50%)	ユニバーサル段階 (50%~)
目的	人間形成・社会化	知識・技能の伝達	新しい広い経験の提供
主要機能	エリート・支配階級の精神や性格の形成	専門分化したエリート養成社会の指導層の育成	産業社会に適応しうる全国民の育成
学生の進学・就学パターン	中等教育修了後ストレートに大学進学、中断なく学習して学位取得、ドロップアウト率低い	中等教育後のノンストレート進学や一時的就学停止(ストップアウト)、ドロップアウトの増加	入学時期の遅れやストップアウト、成人・勤労学生の進学、職業経験者の再入学が激増
特色	同質性(共通の高い基準を持った大学と専門分化した専門学校)	多様性(多様なレベルの水準を持つ高等教育機関の増加)	極度の多様性(共通の一定水準の喪失)

マーチン・トロウ(1976)より作表

私立大学校歌の時代的特徴

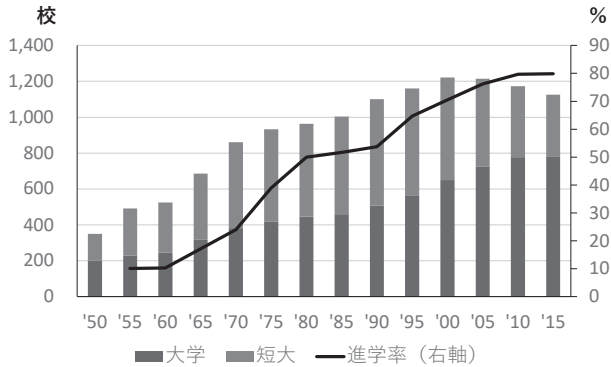


図2 大学・短大数と高等教育機関進学率

おわりに

大学校歌は、カラオケにも収録されており、(株)第一興商が運営する通信カラオケ「DAM」には大学校歌・応援歌が19曲、(株)エクシングが運営する通信カラオケ「JOYSOUND」には大学校歌・学生歌が12曲収録されている。そして、エクシング(2019)によると、大学の校歌・学生歌を歌う人は、男性が80%と圧倒的に多く、男性では20代と50代、60代が多く、女性は20代と30代、50代が多いとのことである。20代は大学在学中か卒業後まもなくの頃である。この頃に歌を覚え、同窓会活動が盛んになる50代、60代に再び、歌うようになるということであろう。カラオケに収録されているような伝統校だけでなく母校の校歌には愛着を持てるはずである。しかし、多くの大学では入学式と卒業式しか触れる機会がないので、その存在すら知られていない場合もある。校歌に愛着を持たせるために、始業・終業のチャイムや最寄り駅の発車チャイムに使用している大学もある。校歌に触れる機会を増やして、大学コミュニティを活性化することを期待する。

〈謝辞〉本研究は、文教大学大学院附属言語文化研究所の研究助成（2019年度）を受けて行った。また、校歌の歌詞について、多くの大学の教職員から情報提供を受けた。ここに記して感謝申し上げる。

文献

- 校歌こだわり調査隊（2004）『発掘！校歌なるほど雑学事典』ヤマハミュージックメディア、p.12
- 浅見雅子・北村眞一（1996）『校歌 心の原風景』学文社、p.21
- 新村出編（2018）『広辞苑 第七版』岩波書店
- 海後宗臣・村上俊亮・細谷俊夫監修（1974）『教育経営事典 第3巻』帝国地方行政学会、p.2
- 谷川俊太郎（1974）「校歌は変わる」『世界』1974年11月号、岩波書店、pp.300-305
- 朝倉隆太郎（1999）『山と校歌：中学校校歌に歌われている山地』二宮書店
- 牛口聖矢・森田哲也ほか（2011）「地域に存在するテキストデータによる地域イメージの構成要素に関する分析」、『第38回土木学会関東支部技術研究発表会概要集』土木学会関東支部、p.IV-12
- 塚田伸也・森田哲也ほか（2013）「群馬県中学校の校歌を事例としたテキスト分析により導かれる山岳の景観言語の検討」『ランドスケープ研究』76（5）日本造園学会、pp.727-730
- 尾崎喜光・杉尾瞭子（2015）「校歌の歌詞に関する言語学的研究」『清心語文』17、ノートルダム清心女子大学、pp.24-42
- 瀬戸口龍一（2013）「私立大学における校歌制定とその意義について—高野辰之と専修大学を中心に—」『専修大学史紀要』5、pp.41-64
- 須藤豊彦編（1985）『全国大学短大高専校歌集』桜楓社

- 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
- マーチン・トロウ（1976）天野郁夫・喜多村和之訳『高学歴社会の大学』東京大学出版会
- 文部科学省（2018）『学校基本調査報告書（高等教育機関編）』日経印刷
- 第一興商（2019）DAM CHANNEL <https://www.clubdam.com/>
（2019.11.20閲覧）
- エクシング（2019）JOYSOUNDカラオケ・歌詞検索 <https://www.joysound.com/web/search/artist/5303>（2019.10.20閲覧）